

義仲の位相

——「猫間」を中心に——

柳田洋一郎

義仲は、清盛、義経、頼朝とともに平家物語において重要な位置を占めている。従来、その人物論は史実あるいは素材としての説話と関連づけて論じられてきた。説話論においても、その発生は事実にかかわらせてとらえられてきている。しかし、語られた義仲は歴史的な人物として自明の存在であるわけではない。たしかに、義仲という名とその事蹟は史実に依拠してはいるが、物語が語っているのは史的な人物に集約されない異質な側面をもっている。それは史実に対する虚構の問題ではなく、語りそのものにふれる問題を含んでいると思われる。以下、物語のなかの義仲と名づけられた存在の位置を再検討し、その伝承史的な位置を明らかにしてみたい。

1

かつて石母田正氏は山田孝雄氏の三部構成説を引いて「この三部

にはそれぞれ中心人物があつて、第一部は清盛であり、第二部は義仲、第三部は義経が物語の中心にすえられている」と述べ、それぞれの人物像を論じた^①。中心人物について論じることが、作品の意味を語ることとなり、その思想的立場を明らかにすることにつながっていた。こうした視点に対し、山下宏明氏は「思想史の基準を以て裁断する」ものとして批判し、物語に即した人物像を秩序と秩序から排除されたものとの関係においてとらえる見方を示した。

院と頼朝の兩人は、物語にあつてはかげに位置しながら、しかも秩序・制度としての重要な位置を体现している。言いかえれば、その行動力を以て秩序をくずしながら、結局は再生した秩序のゆえに滅ぼされて行った清盛の平家一門、義仲、さらには義経の歩みを語るのが『平家物語』であると言える^②。

清盛、義仲、義経らに対立する存在として、後白河と頼朝をあげることじたいは新しいことではない。山下氏の意図は、この二人に

よって物語が依拠する立場を代表させ、歴史のなかの人物と鎮魂される怨霊との接合をはかるところにあったと思われる。

物語は、これら成親や俊寛、以仁王、清盛、義仲、義経たち、秩序に排除された人々の行動を語る事によって、その怨念を流転の苦しみから解き放つて天よみがえらせるところに成り立つものであろう。言いかえれば、秩序の側から、これら、はみ出る主人公たちの行動を修羅として語り再生させるところに軍記物語は成り立つ^④。

ここでいわれる排除の意味は、政治的な次元にとどまるものではない。ただし、テクストの表層において語られているのは、清盛、頼朝、義仲、義経の相互の対立・競合の経過であり、また、京都人から見た頼朝、義仲、義経の人物批評である。したがって、秩序への侵犯や排除を表層のレヴェルでとらえるなら、東国人の京への侵入であり京からの追放であった。むろん、京は国土の中心であり、地勢的に配置された秩序体系の基点であることからすれば、そうした侵入と追放は重要な意味を帯びる。巻八の末尾における、

平家は西国に、兵衛佐は東国に、木曾は宮こにはりおこなふ。

という三者鼎立の状況は、物語の前後関係を無視していえば、まさに秩序侵犯者を地勢的に配置したものであるといえよう。排除されるもの、あるいは、秩序の侵犯者とは、朝敵にはかならない。たとえば、将門に代表される武人としての朝敵である。武久堅氏は、延慶本第二末の「昔将門ヲ被追討事」における将門批判の意味を、頼

朝理解の転換であるとして、

『玉葉』の兼実以来の将門＝頼朝の歴史的類比は歴史的对比に転じ、延慶本の結章の讀える頼朝像に見事に照応することになる^④。

と述べている。しかし、類比の意味を滅亡すべきものという否定的評価に限定することはできない。問題は、そうした評価の前提条件にある清盛、義仲、頼朝は将門の新皇宣言、王城建議に等しい企てをした侵犯者として語られている点にある。

一天の君、万乗のあるじだにもうつけえ給はぬ都を、入道相国、人臣の身としてうつけられるぞおそろしき。(巻五都遷)

抑義仲、一天の君にむかひ奉て軍には勝ぬ。主上にやならまし、法皇にやならまし。主上にならうどおもへども、童にならむもしかるべからず。法皇にならうと思へ共、法師にならむもをかしかるべし。よし／＼さらば閑白にならう。(巻八法住寺合戦)

さる程に、鎌倉殿日本国の惣追捕使を給はつて、反別に兵糧米を宛行べきよし申されけり。朝の怨敵をほろぼしたるものは、半国を給はるといふ事、無量義経に見えたり。(巻一二吉田大納言の沙汰)

清盛の遷都は悪行のきわみとされ、義仲の言動は無知と評される。頼朝の要求は、「将門記」の「将門已ニ柏原帝王ノ五代ノ孫ナリ。縦ヒ永ク半国ヲ領スルモ、豈ニ運ニ非ズト謂ハンヤ」や保元物語の義朝の言葉にもみえる表現であり、平家でも「され共我朝にはいまだ其例なし」とされている。評価の方向は異なるが、こうしたふるまいは王者のものである。清盛が権者とされ、義仲、頼朝が神仏の

加護を得たと語られるように、人臣を超えた存在としてこれら三者は位置づけられている。

朝敵と朝敵討伐者には互換性がある。しかも、両者は正と邪、善と悪、優美と粗野のように価値的に対立するものとして配置される。悪行をきわめた平家を義仲が都から追放し、横暴なる義仲を善なる頼朝の命を受けた義経の軍が殺害する。こうした構造をみるとき、上野千鶴子氏による「スサノヲ来臨神話」の分析は示唆的である。

説話の中には「土地の精霊」という先住権力があらかじめ存在し、新来者はそれと置き換わることによってのみ、支配権力を樹立する。この相互交渉を通じて、非正統的な権力は正統的な権力に置き換わる。逆に言えば、「支配の正統化」のために、神話は、訪問神と土地の霊との相互交渉といった手続きを、要請している。

平家物語における権力の交替は、先住権力と新来者の交替の繰り返しとしてある。そのとき、新来者として登場してくる武人は、異人として現れる。他方、排除される先住権力としての平家、義仲は邪悪なモノとして語られる。このような視点から、兵藤裕己氏の次の指摘を吟味してみることができよう。

清盛による国家秩序（仏法・王法）の破壊、その「悪行」の現報Ⅱ順現業としての平家一門の敗滅、というむしろ読み本で整合化される因果論（唱導的類型）とは、実は寺院―それ自体が、権門体制下における国家である―レベルによる危機のイデオロギー的克服の試みであった。国家を

脅やかすのは、しかしある不可視のモノ、その非（反）歴史的な堆積である。^⑧

平家や義仲は、己の悪行のために滅亡すると語られるが、権力の交替としてみれば、先に都にいた者が新たに都にきたものにとつてかわられることになる。不可視のモノとは、排除された先住権力であり、それじたいも都の外部から侵入してきたものである。排除されるモノは、新たに権力を握ったものと互換性をもち、いわばもうひとつの権力であるがゆえに、不断に消し去られ可視的な領域から追放されなければならない。そのために行われるのが亡魂の供養であり鎮魂の儀礼なのである。それはまた、テクストの表層において貫徹される仏法の理法と合致している。一方、テクストの基層にはモノの語りが織り込まれている。そのようなテクストを復元していくことが伝承史的研究の課題である。そこで留意すべきなのは、テクストの問題であろう。兵藤氏の場合、それは書かれた本文とモノ語りの関係として設定されている。しかし、その関係が、そのまま寺院と琵琶法師の関係にずらされしまうと、伝承を語り手の社会的実態のなかに解消させるおそれがある。伝承の問題は、素材の問題ではないし、伝承過程の問題としてその担い手である伝承者の身分や職能に解消しうることがらではない。

義仲の伝承上の位相を物語のなかにさぐってみよう。従来、都の巷談が平家物語における義仲の人物像の背景であるとされてきた。

義仲に対する平家物語の人物評価の一端は、都人の視点を通して語られている。巻八猫間には次のように語られる。

兵衛佐はかうこそゆゝしくおはしけるに、木曾の左馬頭、都の守護してありけるが、たちのるの振舞の無骨さ、物いふ詞つゞきのかたくななることかぎりなし。

この評価を具体的に示すかたちで猫間中納言に対する応接と牛車での奇行が語られる。さらに、鼓判官への対応、院方との合戦に勝つてのちの専横などを含め、都における義仲の行動が一連の物語として語られる。そこでの義仲像は合戦における義仲像とは異質であるといわれてきた。こうした人物論を説話論の立場から批判したのが、水原一氏である。

出所を異にし、性格を異にする説話が『平家物語』の中には共棲したものである。そういう作品の外の事情を考慮せずに、「義仲像の矛盾」を形而上的に解決しようとし、都会人であり知識人である作者の偏らない観察だとか、「猫間」も義仲の無邪気さに好意をよせた話だ、などと弁解するのは愚かなことである。^⑨

水原氏は、物語と事件・事実とがつながりをもつとし、事件と物

語をつなぐ事件報道者・説話伝播者の役割を重視する。説話の発生を事実と関連づけ、そこから伝承過程を論ずる伝承論は多いが、水原氏の論の特徴は、事件の当事者が報道者であるとともに伝播者であり、さらに物語のなかの登場人物に一致するとみるところにある。つまり、物語の登場人物は事件の現場にいた当事者と一致する。現場に誰かがいなければ話は生まれない。誰かがいたから物語のなかに登場する、という視点である。これに対して、山下宏明氏は「彼ら説話の形成者は、当初にあっては同時に伝承者を兼ねることもあるが、まず説話当事者とは必ずしも重ならないだろう。」と批判を加えている。むろん、当事者の実在を証明することはきわめて困難である。ただし、水原氏は、説話が事実にもとづくとし、当事者の名は事実を証拠だてる不可欠の要素として説話のなかに保存されるとする立場から、義仲の同伴者として語られる覚明や巴の戦線離脱者としての性格を重視している。伝承過程に、唱導集団や芸能者が関与しているとしても、それだけでは覚明や巴という名が伝えられる理由は説明できない。それゆえ、その名は当事者の名であると考えられるわけである。こうした説話論に対して、説話の内容は事実に基づきものであるのではなく伝承の織りなおしとしてあり、固有名詞は説話が伝承のテキストとして織りなおされるそれぞれの編集段階で与えられるものであることを示すことによって反論できるであろう。

事実との関連を検討するうえで、巻八「猫間」は適当な対象である。都で流布した義仲像はそこに集約されている。都における義仲についての一連の語りについて、水原氏は次のように言う。

雑色・牛飼・中間法師といった貴族社会に寄生する都市賤民階級の機敏な話題交換の中に義仲やその関連する事件などが説話化されて行き、それが義仲像の別の一面——「無骨なバーリアン」を作り上げて行ったのだと解される。同時にそこには凋落の支配階級としての猫間中納言や刑部卿三位に対する嘲笑をも伴う形になっているのも注意されてよい。⑩
まず、牛飼や雑色が水原氏がいうように義仲の話の「直接の語り手」であったのかという点について検討し、つづいて、この語りがはたして義仲に対する嘲笑なのかという点を考えてみる。牛車での失態について、今昔物語集二八巻「頼光郎等共、紫野見物語第二」と比較してみよう。この話では、頼光の郎等、平貞道、平季武、公時の三人が、女車を装って賀茂祭の見物にでかけ牛車に乗り慣れないために失態を演じたさまを語っている。

牛ノ一物ニテ、早ク引ツツ行ケバ、横ナハリタル音共ニテ、「痛クナ不
早メツ不早メツ」ト云行ケバ、同ク遣次ケテ行ク車共モ、後ナル歩チ雑
色共モ、此ヲ聞テ恠ビテ、「此ノ女房車ノ、何ナル人ノ乗タルニカ有ラ
ム、東雁ノ鳴合タル様ニテ吉ク□タルハ、心モ不得ヌ事カナ、東人ノ娘
共ノ物見ルニヤ有ラム」ト思ヘドモ、音気ハヒ大キニテ男音也、惣テ心
不得ズノ思ケル。⑪

今昔の話では、目撃者の言葉とともに、季武自身の感想も語られ

ている。

季武が後ニ語リシ也、「猛キ兵ト申セドモ、車ノ戦ハ不用ニ候ナリ。其
ヨリ後懲トモ懲テ車ノ当ニハ不罷リ寄ズ」ト。

車の乗り損ないは、京という異質な文化との接触における失敗である。それは、都市人の側から悪口として語られることもあれば、失敗した本人の側から語られることもある。本人が語る場合、それは異文化の経験談である。関敬吾氏は「愚か村話」が、かならずしも都市や先進文化を担う側のものではなく、村のなかで語られる場合があることを指摘している。

(都での)さまざまな失敗談が笑話となり、村の人びとがその主人公となつてゐる。これもあるいは同行が折々集つて語りあい、親愛感を強めたともいえる。⑫

今昔の話は、都市人の悪口であるとともに、仲間うちの失敗談の性格をも帯びているといえる。もはや、都と外部との対立が緩和され、順化された外来者の話となっている。また、愚か村話では、特定の村の名をあげて話され、人物名があげられる。失敗する者は特定される。内容は類型的であるが、事実談として話される。そのさい、事実かどうかの保証となるのは、語り手および語りである。「私でした」ことは私しか知らない。他の者の失敗については、語り手である証人の名を明らかにする必要はない。「私は見た」あるいは「私は聞いた」ことが証拠である。そして、失敗した当人は固有名

詞をあげて特定される。同じことは、狐狸に化かされた話にもみられる。化かされることは村の外部との接触であり、接触したものは固有名詞をあげて特定される。都での失敗や化かされることは、異質な外部の文化のコードを持つものと内部のコードを持つものとの接触である。化かされた話に狐や狸が登場するように、その接触には外部あるいは異文化の一員が登場しなければならぬ。外来者と接点をもつ都の一員が、「猫間」の牛飼であり今昔の雑色である。ただし、平家物語の場合は、宗盛につかえた牛飼とされ、延慶本が「我主の敵と目さましく、心憂く思けり」とするように義仲との対立が強調される。外部との緊張関係は義仲に対する牛飼の悪意に置き換えられている。

異文化との接触における失敗の語りでは、無知が笑いの誘因となる。ただし、民話のなかの愚か者のように、なにごとに対しても無知なのではない。今昔の郎等は優れた武士であると語られる。

皆、見目ヲキラキラシク、手聞キ魂タク思量有テ、愚ナル事ナカリケリ。
然レバ東ニテモ度々吉キ事共ヲシテ、人ニ被恐タル兵共也

優れた兵が牛車の中ではなすすべもないという対比がある。平家物語にも支配者である義仲が失態を演じる対比がある。しかし、田舎者を軽蔑し、強者の失敗を嘲笑することは、すでに都における位置を与えられた者に対する対応である。たとえば、延慶本は「木曾

義仲の位相

京都にて頑なる振舞する事」という章段名をかかげ、「立居の振舞の無骨さ物なむ云たる詞つきの頑なさ、堅固の田舎人にて浅猿くをかしかりけり」と評価する。そこでの笑いは「一種の機械的のこわばりがある」というベルグソンのいう笑いとどまる。しかし、外部との接触という語りの構造をみてみると、むしろ笑う側の不安が問題となる。G・バタイユは、次のように言う。

私たちが笑うのは、ただ、情報や検討が不十分なために私たちが知るにいたらないといった性質のもつ何らかの理由のためではなく、知らないものが笑いを惹き起こすからこそ笑うのです。

義仲という理解できないものを受容する方法として笑いがあった。そこに、都における義仲、すなわち戦場を離れた義仲が、笑話のフイルターをとおして表現された理由を考えることができよう。

3

「猫間」には、牛車の語りの前に、猫間中納言光高に対する呼び誤りが語られる。この語りには諸本に異向があり、古態についての見解も示されている。覚一本と延慶本を比較しつつ、基層の伝承をさぐってみよう。

覚一本

a1 猫間中納言光高卿といふ人、木曾にの給ひあはずべきことあつてお

はしたりけり

a 2 郎等ども「猫間殿の見参にいり申べき事ありとて、いらせ給ひて候」と申しければ

a 3 木曾大にわらって、「猫は人にげんぎうするか」

延慶本

1 雑色猫間中納言殿の是まで参にこそ候へ入見参と申せと云入り

2 根井と云者木曾に猫殿の参てこそ候へと被仰候と云たり

3 木曾不心得けにて、とはなむ子猫の来とはなにと云事ぞ、猫は人に見参する事かと云て腹立ける。

覚一本では「猫間殿とはえいほで」言い誤つたとされるが、延慶本や長門本では、取り継ぎの根井小弥太が「猫殿」と言い誤つたとする。雑色↓根井↓木曾へと伝達されるうちに、猫間が猫にいかかわるかたちをとる。富倉徳次郎氏は、延慶本他の読みもの系に根井と雑色の滑稽な交渉がえがかれるのに対し、語りもの系は、「その郎等・雑色による滑稽さを、義仲に移したり、または削つたりして、あくまでも義仲の野卑な人物像を描き出す」として、

こうした差異をもつて、読みもの系が語りもの系の義仲像を解体して郎等・雑色を大きく登場させたり、また義仲をいく分常識人に引き戻したというような観測はできないのであって、読みもの系の古体を認めざるを得ず、またこの種の義仲説話の形成に、口さがない都の雑色輩がかなり積極的な役割を持っていたと推測されるのである。

富倉氏は、この語りを事実談にもとづくものとして、伝承者であ

る雑色が介在する読み本を古態とみている。しかし、猫間を猫と呼ぶことは、猫間という名があればなりたつもので、木曾という外来者の介在を不可欠としない。猫間そのものが通称であり、猫とおとした表現もそれに付随していたと考えられる。それゆえ、猫殿という異名は「口さがない都の雑色輩」にかぎらず、貴族のあいだに広く知られていたのではないか。そうした背景のもとに、猫間の語りは、外来者による名の呼び誤りという笑話のパターンにもとづいて、木曾が猫間中納言に異名をつける話として構成される。そのようなパターンをもつ語りとして、今昔物語集第二八卷「木寺基僧、依物咎付異名語第八」をあげることができる。この語りでは、木立を「きだち」と言った山階寺の中算を木寺の基僧が嘲つたのに対し、中算が「こでらのこぞう」と言い返し異名を付けたとする。さらに、今昔は撰政伊尹の評言として、

此レハ中算ガ此ク云ハムトテ、基僧ガ前ニテ云ヒ出シタル事ヲ、何デカ心ヲ不得ズシテ、基僧ガ、案に落テ此ク被云タルコソ弊ケレ。

と、中算の誤りは策略であったという解釈を示している。中算は基僧に「奈良ノ法師コソ尚疎キ者ハ有レ。物云ハ賤キ者カナ」と軽蔑されているが、この逆転によって「物云ヒナム可咲カリケル」と称賛される。「物云ヒ」とは、都文化の中の存在として意識的に伝達コードを変換し、それによって新たな思いもかけぬ意味を生みだし

てみせる言語遊戯の上手ということになる。これに対し、義仲は都文化の外部の存在として、異文化のコードをもちこむ。猫間の語りの後続部分は、猫間の名が発言者をかえて繰り返されたように、反復によって構成される。覚一本で示すと次のようである。

b 1 猫間殿とはえいはで、「猫殿のまれくおはるたるに、物よそへ」とその給ひける。

b 2 「ここにぶあんのひらたけあり、とうく」といそがす。

b 3 合子のいぶせさにめざさりければ、「それは義仲が精進合子ぞ」。

c 1 木曾牛飼とはえいはで、「やれ子牛こでい、やれこうしこでい」といひければ、車をやれといふと心えて

c 2 手がたにむずとりつめて、「あッばれ支度や、是は牛こでいがはからひか、殿のやうか」とぞとふたりける。

c 3 「いかで車であらむがらに、すとをりをばすべき」とて

義仲の「えいはで」は、猫間との応対と牛車の語りが一連のものであることを示す編集句である。覚一本は、木曾が猫間殿と言えないで誤ったとし、延慶本が根井の誤りとするが、ともに義仲が猫間を「猫殿」と呼ぶ理由の説明である。しかし、覚一本の木曾の誤りを、単純に田舎武士の無知というわけにはいかない。義仲は猫間を「猫殿」と呼び、「猫殿は小食におはしけるや。きこゆる猫おろし給ひたり」と嘲弄する。延慶本では、「猫おろし」を「猫殿の御わけぞ給れ」と下し物にする行為として表現している。猫間の食べ残しを、猫の小食に結びつけて笑いの対象にするわけである。それ

は、猫間↓猫↓猫おろし↓下し物という尻取的な意味連関である。ここでは、都市人と外来者との文化的対立よりも言語遊戯的な性格が優位となっている。延慶本が郎等の言い誤りとして語るのは、その話がすでに外部との緊張関係を希薄にしていることを示している。それゆえ、雑色・牛飼の介在を根拠に、説話の古態を主張することは困難である。むしろ、義仲と都市人の対立をもとに構成される語り本の語りに、基層の語りのありかたを認めることができるのである。

4

最後に、語り手の名告りと義仲の名告りについて述べておきたい。語り手と、それが語る対象とは、ともに名づけられている。その名が物語それ自体にどのようなにかかわるのか。語り手が、説話の登場人物を自称するとは、いかなることなのか。水原一氏は、義仲説話の伝承者として巴をあげ、その性格について次のように述べる。

「巴御前」とは、巴が物語の外で義仲主従の最期を物語る職能としての名なのである。(中略)盲者に限らない廻国の語り女たちの話材の中に、巴や静などの物語があったらう事、それを語る自称巴御前・自称静御前が少なからずいたらう事、さかのほって物語中の巴とか静とかが、もともとそうであったか、いつとなしに獲得したか、事件知悉者・経験者であり、生存報道者であり、亡魂供養者でもあるという、さまざまな資格

を一身に集める女として描かれている事は認めなければならないのである。^⑩

都の側からではなく、討たれた義仲の側からの語りを成り立たせるものは、なんらかの形で平家物語のテクストの編集にかかわっているはずである。だが、語り手が「私が巴だ」ということは真偽が判定不能なパラドクスに属する。そのことは、名前の本来的なありかたにかかわっている。

固有名詞というものの一般的な意義は、固有名詞が、原理的に、トートロジーだという点にあるということです。つまり、名前というものは、いずれも、その指示対象を、弁別特徴によって性格づけるのではなく、単に、名前がはりつけられる当の対象を、それとして指し示すだけだということ^⑪です。

したがって、義仲の最期を見た者、義仲の亡魂を供養する者が、巴という名を名のる語り手と結びつくとしても、そのことだけでは、語りがそのように語られたと示すだけであり、事実と語り手との実態的な関連を証明することにはならない。亡魂の供養の語りが、特定の対象に結びつき、さらに、義仲を供養する巴の語りとして成立するためには、語り手と聴衆の双方に、そうであること^⑫を要請し受容する何らかの契機があったと考えられる。そのような契機は、いまのところ平家物語の広汎な流布の実態を探っていくことによつてしか明らかにならない。すくなくとも、巴御前の語りと

いうものがあつたとしても、それは、平家物語と並行して成立したテクストにはかならない。

名前が、その対象を指示するにすぎないということは、語り手の問題だけでなく、語られる対象についてもあてはまる。その一例は、寛一本平家物語の義仲の八幡神前での名告りのなかにみられる。

十三で元服しけるも、八幡へまいる八幡大菩薩の御まへにて、「わが四代の祖父義家朝臣は、此御神の御子となつて、名をば八幡太郎と号しき。かつつは其跡ををうべし」とて、八幡大菩薩の御宝前にてもとよりとりあげ、木曾次郎義仲とこそつゐりけれ。(巻六廻文)

この名告りは神前の誓約としておこなわれる。父や主人によつて命名されたものではなく、一族の認知を得たものでもない。「私は義仲だ」ということは、私が義仲なるものと同一であること、義仲なるものは祖父義家と同一であることの宣言であり、「今日も先に平家をせめおとし、たとへば、日本国ふたりの將軍といはればや」という企てを実現する主体であることの宣言である。しかも、この名告りと企ては、義仲が頼朝のもうひとつの側面であることを意味する。上野千鶴子氏が「訪問神と悪霊とが同じ神格の二重身分的な表現^⑬」であるとするのと同じ意味で、頼朝と義仲は、同じ位格の二項化された表現である。義仲は悪として排除され、獲得した権力を頼朝に与える位置におかれているのである。山下氏は次のよう

にいう。

寛一本によれば、義仲は、その山国育ちの行動力を以て王朝秩序にぶつかり、結局、後白河と結んだ頼朝が派遣した義経の軍に討ちとられた。つまりこの異端者である義仲を排除することによって秩序を保ちえたのは、頼朝であり、この頼朝を利用した後白河であった。^⑭

義仲が異端であるのは、頼朝と同じ位格でありながら価値的に對比される存在であるからである。頼朝は、異端としての義仲を倒すことによって正統性を獲得する。山下氏がいうように秩序は保たれたのではなく、義仲の排除をとおして頼朝のもとにもたらされたのである。

巴を名のる語り手によって語られる義仲という名の亡霊は、そのまま頼朝と対照的な位置にある義仲と一致しない。亡魂の供養の語りと権力の交替の語りとは同じではないからである。権力の交替の語りは、山下氏が秩序の側とよんだ国家の歴史のうちに吸収される。他方、亡魂供養の語りには同じ位格にあるふたつの存在を語る必然性はない。亡魂が荒れて祟りをなしたとしても、それは祀られることで鎮められる。亡魂供養の語りと権力の交替の語りとが結びつく契機は、義仲という名をおいてである。しかも、その名はいままで考察してきたように、外部から訪れる者、異人に対する呼び名である。

義仲の位相

注

- ① 石母田正『平家物語』岩波新書、昭和32年、63頁。
- ② 山下宏明『軍記物語の方法』有精堂、昭和58年、47、96頁。同右、96頁。
- ③ 武久堅『平家物語成立過程考』桜楓社、昭和61年、140頁。
- ④ 高木市之助他校注『平家物語』上下、岩波書店、昭和34年。
- ⑤ 梶原正昭訳注『将門記』2、平凡社、昭和51年。
- ⑥ 上野千鶴子『構造主義の冒険』勁草書房、昭和60年、80頁。
- ⑦ 兵藤裕己『語り物序説―「平家」語りの発生と表現―』有精堂、昭和60年、70頁。
- ⑧ 水原一『軍記物と説話文学』『日本の説話4中世Ⅱ』東京美術、昭和49年、137頁。
- ⑨ 山下宏明『平家物語の生成』明治書院、昭和59年、20頁。
- ⑩ 水原一『平家物語の形成』加藤中道館、昭和46年、51頁。
- ⑪ 山田孝雄他校注『今昔物語集』五、岩波書店、昭和38年。
- ⑫ 関敬吾『昔話と笑話』岩崎美術社、昭和43年、168頁。
- ⑬ ベルグソン『笑』林達夫訳、岩波文庫、昭和13年、19頁。
- ⑭ G・パタイユ『八非―知／閉じざる思考』西谷修訳、哲学書房、昭和61年、72頁。
- ⑮ 吉沢義則校註『心永書写延慶本平家物語』白帝社、昭和10年。
- ⑯ 富倉徳次郎『平家物語全注釈』中、角川書店、昭和42年、522頁。
- ⑰ 注⑩前掲書、64頁。
- ⑱ Y・M・ロートマン、B・A・ウスベンスキー「神話―固有な名詞―文化」北岡誠司訳、『現代思想』7―9、青土社、昭和54年7月、139頁。
- ⑳ 注⑦前掲書、82頁。
- ㉑ 注②前掲書、95頁。